

タイトル： パンデミックを生きる（４）

先日、新型コロナ対策で脚光を浴びていらっしゃる、東大先端科学研究センターの児玉先生（本シリーズ二度目のご登場です）が、奥様が主宰されるトライアングル聴覚障害者支援財団の子供たちを集めて、ズーム教室を開かれました。

私の友人がそのボランティアをされており、紹介してもらって、参観させて頂きました。

約30人位のリモート受講者がいたようです。

私は以前、バスに乗った聴覚障害者らしき人が、バスの中と外でバスが発車するまで手話で話し続け、笑いあっているのを見て彼らの情報伝達手段の凄さに感心しました。

新型コロナの流行で一気に加速したリモートワークやリモート学習は、電話だけだった時代をはるかに超えて、画像の共有＝テレビ電話の普及を邁進させました。相手が見えさえすれば聴覚障害者は情報伝達に困りません。まして画像はどんどん良くなり、タイムラグもなく環境は整ったと言えます。

児玉先生のコロナ授業は内容こそ初歩的ではありましたが、障害者も情報を共有しようという試みは、素晴らしいものだと感じました。また、参加されているサポーターの皆さんも「この環境は私たち（聴覚障害者さんたち）にとっては『追い風』だ」と、皆を励ましていました。無論、一般論としては齟齬を買う発言だけれど、そのサポーターさんはちゃんとエクスキューズをしておりました。（笑）。

興味深かったのは、多くの人が感染対策の基本「マスク」を使用することで、彼らの重要な読唇術を妨げるということでした。確かに手話だけでなく、読唇術も彼らの武器のひとつです。学校の授業で先生がマスクを着けることでそのような困難が生まれたため、理解ある学校はマスクをフェイスシールドへ移行したそうです。

しかし、一般に文科省と日本医師会（感染症学会）は、主にマスクを第一選択としているので、融通の利かない学校ではフェイスシールドへの転用が進まないそうです。あとは先生個人の共感性に頼るしかない、学校組織を動かすことは容易ではないらしいです。

これを聴いていて私は、小学1年になる孫や級友たちが入学当初、入学式からリモートズームで始まった新学期では先生の顔をはっきり見れたのに、登校が始まったの教室では、先生の顔がマスクで全部見えない。笑ったり、叱ったりするときの表情は目でしかわからない、というのがある種の不安を与えているようで、昨今問題視される特定の発達障害を（多かれ少なかれ誰にでもあるのですが）持つお子さんはそのストレスがか

なり大きい様子だ、ということをおもひ出しました。

また、別の特定のお子さんは、マスクで半分覆われた母親の顔を母と認識できなくなり、怯えるとも聞きます。

こうした個々の事情に接すると、マスク第一主義も児童心理学、精神医学の知識を持って、あらゆる現状を検討して選択しを広めていく必要があると思いました。

かく言う私は実は、何を隠そう視覚障害者ですので、今回はこんな時代に視覚障害者が味わっている、また別の大きなハードルについてお話しします。パンデミックの世界では、人々の連帯が大変重要です。が、その連帯にくさびを打つような「ディスタンス」について考えたいと思います。